

サロンの文芸活動

—皇后定子とその系流— (I)

目加田 さくを

十七・八世紀のフランスで流行した名流婦人のサロンに先行すること七・八百年、東洋の日本において、貴婦人達によつて華やかにサロンの文芸活動が花ひらいた。もとより、その先輩は唐代の公主サロンで、その全盛期の声誉が日本の詩苑・後宮サロンを刺激したのであるが、それは拙著にゆずる。貴婦人のサロンの中心人物数十人中、皇后定子は実力においてNo.1である。定子のもつ漢文芸・日本文芸の素養・服飾感覺等、サロンの主人公としての器量・資質の由来を、今回はその血統に視座をすえて、一門の文芸活動をあとづける。在原業平、高階一門、中関白一門からはじめ、定子、姫子、祐子、祿子の活動に言及してゆく。しぜん、平安朝の文芸界に彼らが果たした役割に照明をあてることとなる。

(一) 在原業平・齋宮恬子より定子以前迄

権大納言行成の権記、寛弘八年五月の條

廿七日庚子 雖有所勞、無便箠居、相扶參内、爲御惱消除、自今日限三日、仁王經不斷經御讀經被行、有行香御讀經、未始之前有召、候御前 仰云、可讓位之由一定已成、一親王事可如何哉、即奏云、

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (I)

「此皇子事所思、歎尤可然、抑忠仁公寛大長者也、昔水尾天皇著文、德天皇第四子也、天皇愛姬紀氏所産第一皇子、依其母愛亦被優寵、帝有以正嫡令嗣皇統之志、然而第四皇子以外祖父忠仁公朝家重臣之故、遂得爲儲貳、今左大臣者亦當今重臣外戚其人也、以外孫第二皇子定應欲爲儲宮、尤可然也、今聖上雖欲以嫡爲儲、丞相未必早承引、當有御惱、時代忽變事若數々、如不得弓矢之者、於讓無益、徒不可令勞神襟、仁和先帝依有皇運、雖及老年遂登帝位、恒貞親王始備儲貳、終被弃置、前代得失略如比、如此大事只任宗廟社稷之神、非敢人力之所及者也、但故皇后宮外戚高氏之先、依齋宮事爲其後胤之者、皆以不和也、今爲皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也、猶有愛憐之御意、給年官年爵并年給受領之吏等、今一兩宮臣得格勤之便、是上計也者、……」

右は一條帝讓位直前の様相を詳かに伝える。一條帝が讓位に際して、第一親王敦康を春宮にすべきか、第二親王敦成にすべきか、行成に下問する条である。本来、東宮は生母が皇后であり、第一親王であれば問題なく立坊の運びとなる。祖父中関白道隆、生母定子皇

后が存生であれば、恙なく敦康親王が皇儲となっていた筈。しかし、中関白、皇后ともに薨じ、伯父内大臣伊周らが花山院に不敬罪を犯し、流謫に遭って以来、一門は権力の座を悉く逐われ、左大臣道長の天下となった。一條帝は左大臣の孫敦成親王を考えざるをえなくなつた時期である。権大納言行成は、①先例として文徳帝が皇儲を決定するに際して選んだ道を提示する。

第一親王惟喬

母紀静子

祖父

正四位下
紀名虎

第四親王惟仁

母藤明子

祖父

忠仁公

本政大臣良房

「以外祖父忠仁公朝家重臣之故」遂に第四皇子が皇儲となつた。

ついで、②現代の情勢に言及する。「今左大臣者亦今重臣外戚其人也」外孫第二親王を儲宮にと願望している。帝が第一親王を立坊させようとしても左大臣が容易に承服すまい。……文徳帝の選択の場合と事情が異なるのは、第一皇子が皇后腹、外祖父が関白であつたという出自の高貴さである。これは無視しえぬ条件である。ここに、行成は、光孝仁和帝は皇運あるに依つて老年に及んで帝位に登り、恒貞親王は春宮になりながら、廃立された。皇位という大事の決定は、③「宗廟社稷の神意」によるもので、「敢て人力の及ぶ所にあらず」と断言し、切り札として、④「故皇后外戚高氏の先、依齋宮事為其後胤之者、皆以不和也、今為皇子非無所怖、能可被」被行「謝太神宮也」……と、伊勢大神宮を持ち出したのである。それが決定的ダメージとして直後に言葉をにつけて、「猶有愛憐之御意」と、敦康を外した後の対応を迄「年官年爵」と、ことごとまかに進言する。即ち、いやしくも、立坊ひいては皇位決定の否定条件として、公人権大納言が天皇の諮問に応じてあげた「齋宮の一

件」は、これは、権大納言も、これに反論も否定もしなかつた一條帝も、その時点において、「事実である」として認定していた何よりの証拠である。即ち、高階氏系図、皇胤紹運録が記載するように、在原業平と齋宮恬子との間に出生の師尚が、高階家に入り、その血統が高貴子から皇后定子に、第一親王敦康に流れているという事は、寛弘八年五月廿七日の時点において、天皇、権大納言によって確認され、皇儲としては失格の烙印を押されることとなつた。更に、その事実を、権大納言行成が、克明におのれの日記に記しつけている事は、重要な意味をもつ。行成にあつては、この進言に自信と自負があつたわけである。彼のこの提言が、いふなれば、一言もつて敦成の立坊を決定し、後一條帝を出現させたからである。

さて、本稿は、師尚を高氏の先と認定した権大納言、一條帝にしたがつて、定子の先祖に業平・恬子の血統というものを考えてゆくことにする。

(1) 百済系帰化人の血統

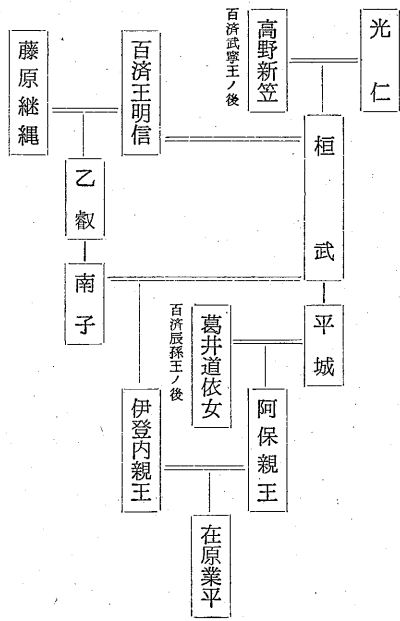
桓武帝は母高野新(御)笠から、百済系帰化人の血統を承けている。統紀延暦八年十二月「皇太后姓和氏、諱新笠、贈正一位乙繼之女也、母贈正一位大枝朝臣眞妹、后先出自百済武寧王之子純陀太子」と記す。桓武帝自身も後宮に九人(坂上春子、百済王孝法、百済王惠信、錦部連真奴、全全子、百済王敬仁、酒人内親王、百済貞香、百済永継)の百済系帰化人の血統をひく後宮を納れて、葛井、太田、朝原、春日、高津、駿河、善原の諸親王・内親王及び良峯安世という帰化人系血統の濃い子女を多勢もつけた。長子

- の平城帝もまた、百済系帰化人を後宮に納れた。その子阿保親王、在原業平の父は、続日本後記に、「承和九年十月壬午彈正尹三品阿保親王薨、…平城之第一皇子也、母葛井氏…親王素性謙退、才兼文武、有膂力、妙絃歌、春秋五十一而薨」、この葛井氏は、葛井宿祢道依女藤子で、葛井連は百済辰孫王之後、午定君之後裔、百済族中の大姓也と称される出自である。業平母は桓武皇女伊豆内親王、これ又、母が帰化人系である。中納言乙叡女藤南子。乙叡は「母尚侍百済王明信被帝寵渥、乙叡以父母之故、頻歷頭要、至中納言、性頑驕、好妾馬、縁山臨水、多置別業以信宿之、必備内事、推国天皇城平為太子時、乙叡侍宴、濁酒不敬、天皇含之、後遣伊予親王事、辟連乙叡、免婦子第、自知無罪、以憂而終、時卅八」(日本後紀) 桓武帝は尚侍従三位百済王明信を寵愛し、又、その孫女南子をも後宮に納れて伊豆内親王を設けた。嵯峨帝も百済王貴命との間に忠良親王、百済王慶命との間に源定を設けた。この忠良親王は「容貌美麗、貞觀十八年二月薨、五十八、時人之悟」(皇胤顯遷錄) といひ、母貴命は「姿質殊麗、閑於女工」と称され女御となつた人物。源定の子至は、伊勢物語に「天の下の色好源至」とするところ。百済系貴族については、「物語作家冢図の研究」(百済系貴族と好色 三三七頁～三四九頁)に詳述したように、
- (a) 百済系帰化人後宮、その縁辺者は破格の官位昇進
 - (b) 好色・好酒色(百済を滅亡させた義慈王「王与宮人淫荒耽染、飲酒不止」以来)
 - (c) 風雅な生活・社交・芸術愛好
 - (d) 容貌美麗
 - (e) 才学無く、お坊ちゃん型

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

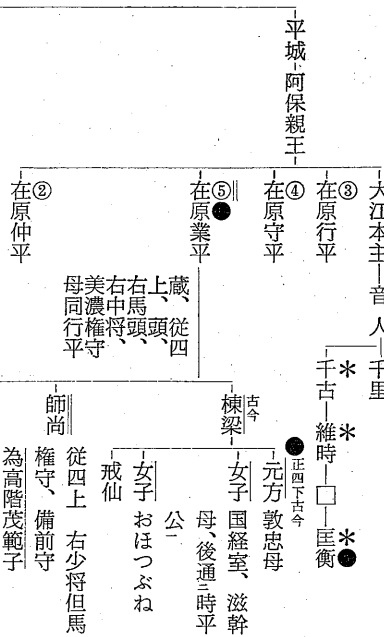
等の特色があった。就中、好色の傾向が顕著で、夥しい子女、多勢の後宮をもつ桓武・平城・嵯峨三帝にも著しい。業平は父系、母系ともに百済系帰化人の濃い血統をうけた人間であった。三代實録元慶四年五月廿八日の条に「從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平…卒。業平者。故四品阿保親王第五之子。正三位行中納言行平之弟也。阿保親王娶桓武皇女伊登内親王。生業平。天長三年親王上表二日。無品高岳親王之男女。先停王号。賜朝臣姓。臣之子息未預改姓。既為昆弟之子。寧異齒列之差。於是詔伸平行平守平等。賜姓在原朝臣。業平。体貌閑麗。放縱不拘。畧無才学。善作和歌。貞觀四年三月授從五位上。五年二月拜左兵衛佐。数年遷左近衛權少將。尋遷右馬頭。累加至從四位下。元慶元年遷為右近衛權中將。明年兼相模權守。後遷兼美濃權守。卒年五十六。」と記された「体貌閑麗、放縱不拘」のくだり、美男で奔放な情熱、純情の性は百済系貴族の血統に由来するところが多いと筆者はのべたところ。大鏡若頼本本合子院には「王じゅうなごきこえて天上人にておはしましける時天上のごいしるのまへになりひらの中将とすまひとらせ給けるほどにこいしに打かけられてかうらむおれにけりそのおれめいまに侍る也」という逸話をとどめる。宇多帝が王侍従であつた時期で業平存生中となれば、56才14才・55才13才・54才12才あたりで、四十二才も年少の皇子相手に相撲をとつて皇子を投げとばした体力、みづ／＼しい気力、明朗な氣質、「善和歌」といふ父阿保親王ゆづりのものであろう。これが業平の高鳴る浪漫精神、溢れる情熱を生むので、業平は決して、華奢で

弱々しい優男ではない。容姿、身体も、精神も。高子、恬子との関係、惟喬親王への親近といったいわば反体制的態度、周囲に対し、筆者の^(註)対象をかばう能動的生は、これに帰因する。



百済系帰化人の後宮が、多数、桓武、平城、嵯峨の宮廷に入って寵遇された事実は、皇胤紹運録が掲げる、百済王族系帰化人の血統をうける天皇の子女が多勢出現しただけではない。日本の宮廷に、一層、百済宮廷風の浸潤を考えないわけにはゆくまい。嵯峨朝をピークとする遊宴、詩苑、そこで生れた漢詩盛行の相がその第一である。第二は、多数の後宮を擁する宮廷に漂う好色の雰囲気、後宮の紊乱である。つまりは高子事件、齋宮恬子事件に対する黙過の対応となる。

①〜⑤筆者推定兄弟順位 ●家集をもつ者 *漢詩人
 (皇胤紹運録、尊卑分脈、公卿補任、三代夷録ニヨリ作成)



(皇胤紹運録、尊卑分脈、大和物語ニヨリ作製)

伊登内親王 三代夷録の記述、②阿保親王之第五子也、⑥賜姓が
 ②仲平、③行平、④守平であることから、②〜④を
 考える。①はこれを削除する根拠がないので①とし
 ておく。

(2) 業平一門

業平の確実な詠藻は、今日では、彼の歿後二十五年頃に成った勅撰和歌集古今和歌集中の業平歌を第一にあげる外はない。これをもとに、伊勢物語をも吟味しながら扱うこととなる。

業平及びその一門の歌才は、端的に古今集に採択した彼等の詠藻によって証される。

業平 30首、棟梁 4首。元方 14首—古今集巻頭の栄に輝く。行平 4首、千里 10首、伊登内親王 1首……六十三首。因みに、貫之 102首、躬恒 60首、友則 46首、忠峯 36首、素性 37首、伊勢 22首、小町 18首、遍照 17首である。伝来歌数の少い六歌仙で、30首は驚異的である。しかも、巻頭歌二首をもつ。恋五巻の中、二巻が業平歌である。—恋一・恋四詠人しらず。恋二小町歌。恋三・恋五業平—業平歌に異常に長文の詞書をもつ事と共に撰者らの業平への尊崇が察せられる。事実、古今集から業平歌 30首を除外すれば古今集の魅力は半減する。古来、古今集を支えてきたものは業平 30首、小町 18首といつても過言ではあるまい。

この業平の一門は古今集で六十三首を占めるが、大和物語でも存在が華やかである。(漢数字八章段)

- 業平(在中将) 百六〇 百六一 百六二 百六三 百六四 百六五 百六六 10首 計 18首
- 孫 国経北方(本院北方) 百二四
- 孫 おほつぶね 十四 1首
- 孫 戒仙 二十七 二十八 五十 3首
- 次男在次君滋春 百四三 百四四 4首

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

この業平の家集(原始業平集)が基となって、古今集・後撰集等を素材に「昔男ありけり」と業平を思わせる男の歌物語が作られたのが伊勢物語である。伊勢物語は高子関係章段も、齋宮関係章段も詳しい地の文、物語をもつ。これが伝播された。大鏡(陽成院)にいう。「いかなる人かはこのごろ古今・伊勢物語などおぼえさせたまはぬはあらんずる」。つまり、大鏡成立の十一世紀中葉、すでに知識階層に「業平と齋宮恬子」の一件はあまねく知れわたっていた、ということになる。

齋宮恬子と業平関係年表(三代実録・職事補任ニヨル)

貞観	元観	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
859	861	862	863	864	865	866	867	868	869	
齋宮卜定 十月五日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日	群行 九月一日
12才 (福井氏説)	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
業平	35才	37	38	39	40	41	42	43	44	45
○死亡 ○出生	九月十九日 母伊登内親王 60才	三月七日 從五上 (正六位上ヨリ)	二月十日 左兵衛権佐	三月 左近権少将	三月九日 右馬頭	高子入内 25才	從五高子 正五下 26才	從五高子 正五下 26才	從五高子 正五下 26才	從五高子 正五下 26才
		行平從四下	信濃守							陽成○(母27才清和父18才)

十二	870								
十三	871								
十四	872								
十五	873								
十六	874								
十七	875								
十八	876	退下	十一月二十九日	十一月十九日	護位	29	52	三月 貞教親王トナル ^{2才} 行平孫 十二月 遣參議從三位行右衛門督大 頭在原朝臣業平向田邑山陵	
元慶	877					30	53	一月十七日 右近衛權中將	
二	878					...	54	(兼相模權守兼美濃權守)	
三	879					...	55	十月 補右近衛中將從四位上在原 業平藏人頭(職事補任)	
四	880					...	56	五月二日 從四位上右近衛權中將兼 美濃權守	

古今集 (西下氏校本ニヨル)

業平朝臣の伊勢のくにまかりける時齋宮なりける人にいとしの久みぞかにあひて又のあしたに人やるすべなくておもひをりける
あひたに女のもとよりをこせたりける
おほつかた後女志久真俗

645 君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつくかねてかさめてか
返し
なりひらの朝臣
こよみ権家前伏女島貞倫贈天

646 かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつとは世人さためよ

唐代伝奇鴛々伝と伊勢物語を対照比較した拙著「物語作家圈の研究」の六八九頁を再び掲げる。

話柄の類似に傍線を附した。

会真記(鴛鴦伝) 唐元稹撰

唐貞元中有張生者。性温茂。美丰容。内秉堅孤。……以是年二十三。……張生游於蒲。蒲之東十余里。有僧舍。曰普救寺。張生寓焉。適有崔氏孀婦。将歸長安。路出於蒲。亦止茲寺。崔氏婦鄭女也。張出於鄭。緒其親乃異派之從母。……是夕紅娘復至。持綵箋以授張曰。崔所命也。題其篇曰明月三五夜。其詞曰。

「待月西廂下。迎風戶半開。扞牆花影動。疑是玉人来。」
張亦微諭其旨。是夕歲二月旬有四日矣。崔之東有杏花樹。纒援可蹶。既望之夕。張因梯其樹而踰焉。達于西廂。則戶半開矣。紅娘寢於床上。因驚之。……張生臨軒獨寢。忽有人覺之。驚歎而起。則紅娘歛衾携枕而至。撫張曰至矣。至矣。睡何為哉。置枕設衾而去。張生拭目危坐久之。猶疑夢寐。然而修謹以俟。俄而紅娘捧崔氏而至。至則嬌羞容冶。力不能運支体。曩時端莊不復同矣。是夕旬有八日也。斜月晶熒。幽輝半床。張生飄飄然且疑神仙之徒。不謂從人間。至矣有頃寺鐘鳴。天將曉。紅娘促去。崔氏嬌啼宛轉。紅娘又捧之而去。終夕無一言。張生弁色而興。自疑曰。豈其夢邪。及明觀粧在聲。

香在衣。涙光發發然。猶坐於因席二而已。……………
後乃因_三其夫_三言_三於_三崔_三。求_三以_三外_三兄_三見_三。夫語_レ之、而崔終不_レ爲_レ出。張怨念之誠。動_レ於_レ顔色。崔知_レ之。潛賦_三一章_三詞_三曰。

自_レ從_レ別_レ後_レ滅_レ容_レ光。万_レ軒_レ千_レ廻_レ顧_レ下_レ床。不_レ爲_レ傍_レ人_レ羞_レ不_レ起。爲_レ郎_レ憔悴_レ却_レ羞_レ郎。

竟不_レ之_レ見。後_レ數_レ日。張生_レ將_レ行。又_レ賦_三二_レ章_三以_レ謝_三絶_三之。

棄_レ置_三今_三何_三道。當時_レ且_レ自_レ親。還_レ將_レ旧_レ來_レ意。憐_レ取_レ眼_レ前_レ人。自_レ是_レ絶_レ不_レ復_レ知……………

伊勢物語 (原始業平集、業平) 業平「体親開題」(三代業經) にかかれり。

〔六十九〕 昔、男ありけり、その男、伊勢国に狩の使に、いきけるにかの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使よりは、この人能くいたはれ」といひやれりければ、親のことなりければいと懇にいたはりけり。朝には狩にいだし立てゝやり、夕さりはかへりつゝ、そこに来させけり。かくて懇にいたつきけり。二日といふ夜、男「われて逢はむ」といふ。女もはた逢はじとも思へらず。されどいと人目繁ければえ逢はず。使実とある人なれば、遠くも宿さず。女の聞も近くありければ、女、人をしづめて、子ひとつばかりに男の許に來りけり。男はた寝られざりければ、外の方を見出して臥せるに、月の朧なるに、小き童をさきに立てゝ人立てり。男いと嬉しくて、我が寝る所にゐて入りて、子ひとつより丑三つまであるにまだ何事も語はぬに歸りにけり。男いと悲しくて寝ずなりにけり。つと

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

めて、いぶかしけれど、我が人をやるべきにしもあらねば、いと心もとなくて待ち居れば、明け離れてしばしある程に、女のもとより、ことばはなくて、

君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか
男いといとう泣きて詠める。

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとはこよひさだめよ
と詠みてやりて、狩に出でぬ。……………歌を書きて出し

たり。とりて見れば、
E ちち人のわたれどぬれぬえにしあれば、
と書きて末はなし。その益のさらに、続松の炭して歌の末を書きつ

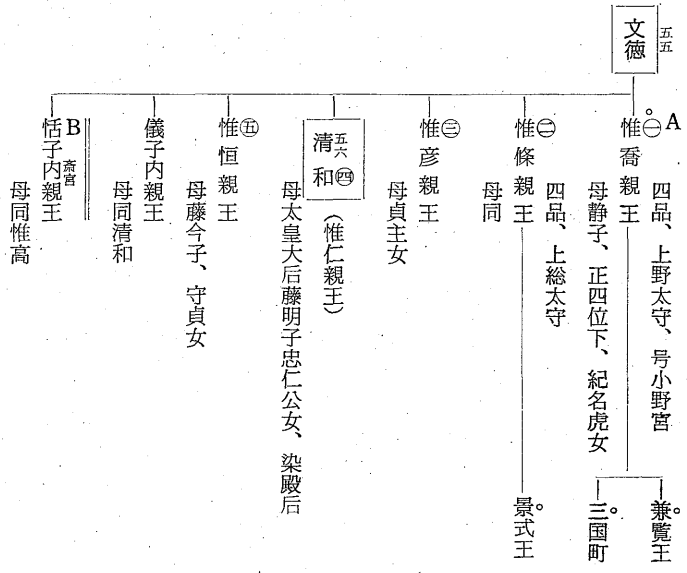
またあふさかの関は越えなむとて、明くれば尾張国へ越えにけり、
B 齋院は水尾の御時、文徳天皇の御女、これたかの皇子のいもうと。

傍線ヶ所の如くである。但し、鶯々伝は、現在書目録にはみえていないが唐の代表的艶情類伝奇であるから或は留學生の口伝誦承があったのではあるまいか。

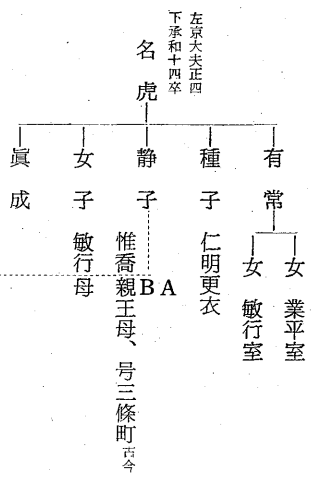
(Bは全真記は源經・伊勢語は親しい親王の妹という縁。Eは共に女の詩歌) B業平、妻、從姉妹
「狩使」を信ずれば、清和帝讓位(十一月廿九)であわただしかった貞観十八年は除外すべきではあるう。恬子は群行(九月一日)業平は母伊登内親王を亡くした(九月十九日)貞観三年は考えられず、従五位上に昇任した貞観四年以降、貞観十七年の間、恬子15才く28才、業平3才く51才の間に、兩人の間に起つた恋愛事件と考える。

皇胤紹運録

紀氏系図



〔頭〕紀略、延喜十三年六月十八日前齋宮
恬子内親王薨



(3) 齋宮恬子の積極性と歌

○後朝の文を齋宮から先きに届けた行爲

古今集詞書では「人やるすべなくて……」で男が逡巡しているところへ、女方からさきに後朝の文が来る。伊勢物語では、一層積極的で、驚々よろしく齋宮が男の寝所にやって来たとなる。後朝の文は、元来、朝帰りの男が帰宅後、女方へ届けるもので、その時間が早い程、愛情が深いと判断され、その早い遅いで女方は一喜一憂した。落窪少将が面白駒を使ってやった後朝の文のいたづらは、著名である。しかし、実際には、平安朝でも頗る積極的な才媛がいたのであって、平仲物語でも、今業平と噂の高い貞文に、女性からさきに後朝の文を贈った例が十段十七段(目加田編著、影印平仲物語)、又、交際をはじめるに際して、女性の方からさきに歌を詠みかけた場合十段十二段廿六段三七段等、多いのである。つまり、平安朝にあっては、宮仕の女房、乳母らは和歌の才能、臨機応変の対応、音楽の才等が要求され、宮廷はもとより貴族、地方官等の邸においても、その子女の教養は、「一には御手を習ひたまへ、二には琴の御ことを人よりことに弾きまさらんとおぼせ、さては古今の歌二十巻をみなうかべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」というのであった。就中、歌才は必須教養科目とされていた。和歌の性質上、独詠で楽しむ場合もあるが、贈答によって社交を楽しみ、歌才を磨いたから、和歌制作の欲求が又、社交を、恋愛を助長する結果となったのである。歌才ある才媛は歌を贈答するチャンスを狙っていたともいえるのである。齋宮恬子の場合も、この傾向を無視してはならない。

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

○齋宮の位相とブライド

齋宮は日本国・天皇家の皇祖神、天照大神を祀る神人である。したがって、齋王卜定以来、天皇に対してさへ氣位をもつにいたるような処遇をうけつづける。齋宮関係の職員は延喜式によると、初齋院でも、別当五位二人中臣一人忌部一人官主一人内舍人一人大舍人二人官舍人十人膳部三人殿部三人炊部一人水部三人酒部一人掃部三人采女二人内女孺二人乳母三人官女孺十四人戸座一人火炬小子二人今良四人仕丁十二人女丁八人但遷野宮者加内舍人一人大舍人二人神部四人卜部三人官舍人十人炊部酒部各二人采女四人官女孺廿五人洗人二人間人二人女丁八人(一四五人)である。神龜四年齋宮官人一百二十一人を補すとある。卜定以来、木綿、櫛をめぐらした淨域に起居した神人齋王は、少女の身で百何十人という輩下を従えて、もの／＼しい群行の後、多氣の齋宮に入る。三時の大祭、太神宮での莊嚴な神事を、首長として執行している中に、しぜん齋王が、唐代公主の風に通う誇り高さ、氣位をもつにいたったろうことはむしろ当然である。神の忌垣をはばかり逡巡する男をリードする若い齋宮は、業平を、美男の一歌人、一狩使と見なしているにすぎぬ。

○齋宮の無聊と風流 — 公主サロンの氣位

都を遠く離れた伊勢国多氣宮に、父文德帝既に亡く、母紀静子とも別れて、一人暮した齋宮十五年(14才)29才)の日々は、寂しく徒然なものであったと想像される。後年、齋宮女御徽子は、幼少の時代味わった齋宮ぐらしの寂寥を、一人子の規子(29才)に味わせるに忍びず、かつは古巢の齋宮をよりどころに、円融帝の宣旨を無視して群行に同行したのである。多氣の宮にあって二人は、源順ら

と歌会を催した。長久元年（一〇四〇）12才の齋宮良子の無聊を慰めようと、女房らは伊勢の浦々で貝を拾いあつめ、華麗な貝合せ（歌合）を催したのである。無聊な齋宮恬子の日常に、突如、都の香気を漂わせて訪れた貴公子業平は、当時有名な風流歌人。悲運の同母兄惟喬親王に好意をよせる美しい貴公子に、伊勢物語が物語るように、母紀氏から「よくいたはれ」との伝言が届いていたとしても不思議はなく、都恋しい齋宮にとつては、飛びつきたい都人、最高の贈答歌の相手が現われた、という興味から、大胆な行動、恋愛への移行は、けだし自然の勢いというものであろう。次の歌にみるかぎり、微塵も恋をはばかる風はない。

A B 君やこし 我やゆきけむ おもほえず 夢かうつつか ねてかさめ
A' B' X C D C' D'

A A' 反対、B B' 反対、C C' 同対、D D' 同対、C D C' D' 同対
と対の技巧を駆使し、恋、歌のあそびに興じている。恋を恋する雰
囲気で、いかにも誇りかである。「齋王たる身が…」とはばかる気
配などは微塵もなく、全く自由な貴婦人の恋の態度である。これに
対し、業平は

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとはこよひさだめよ
z y

受身の態であったが漸くz'yで切りかえし攻勢に出た。zは女の歌
に「昨夜」の言葉の内在を暗示し、異対を形式する。

伊勢物語では更に、「かち人のわたれどぬれぬえにしあれば」と、
儂い縁を惜しむ上句を詠みかける。男が下句を、「また逢坂の関は
こえなむ」と愛情の継続を誓って連歌形がまとまる。後世六歌仙の

筆頭として声誉の高い、当時も評判の業平を相手にして、絶えずリ
ードしつづけ、華やかな贈答を形成したが、この才気と誇り高き気
位に注目しよう。それは単なる色好と齋宮の情事として把握すべき
ではなく、齋宮での風流として認めるべきであらう。風流について
は、つとに星川清孝博士の卓説がある。博士の御説は、平易にいえ
ば、万葉集の「みやびを」遊士、風流士を

A B 遊士跡吾者聞流平屋戸不借吾平還利於曾能風流士 (石川女郎)
B A

石川女郎はAみやびをを唐代の意味、婀娜たる貴遊の士・すきもの
の意に用い、大伴田主はBみやびをを六朝風みやびを、真の意味の
みやびを、純粹な人間、何物にも拘束されぬ自由の士・高雅な貴遊
の士の意に用いた、というところであらうか。日本語の「みやび」
は「みやぶ」の連用形名詞で、宮廷風の意から出る。これに対する
語は、「ひなび」・「さとび」である。後者が粗野、素朴であるに
対し、前者「みやび」は洗練された教養、文化の香りが漂う。宮廷
は一国文化の粹をあつめ、その中心であったから。詩を詠じ、和歌
を詠む、宮廷風の最たるものである。前述のように、百済貴族系の
後宮を多く納れた宮廷は、天皇を中心に好色の風が著しかった。齋
王宮のみやびが、六朝風遊士、風流士より、唐風のみやびをに近く
業平を遇した結果が、師尚の出生となつたのである。「清浄たるべ
き齋王がもし…」という禁忌も有耶無耶にすまされる時期であつ
た。紹運録によれば、その子は二人といひ一人は高階氏に入つたと
される。業平と恬子との血統を承けついで師尚が高階家に入り、良

臣、成忠、貴子をへて皇后定子へと流れたのである。恐らく師尚は高階家の女と婚し高階を名のったと思われる。ここで高階氏を見てみよう。

(4) 高階氏の血統—宮廷詩宴の祖、長屋王—と文才

次に高階氏系図を掲げ、詩苑・サロンの主人公として著名な人物

尊卑分脈 高階氏(追加記入)

天武天皇—高市親王—**正二位左大臣** ● 長屋王—桑田王—礪部王—石見王—峯緒

●元慶四五十八卒五十八才

從五上 備前但馬權守從四上右中將 師尚

実在原業平朝臣子也密通齋宮
恬子内親王出生依之此氏族子
孫不参宮者也

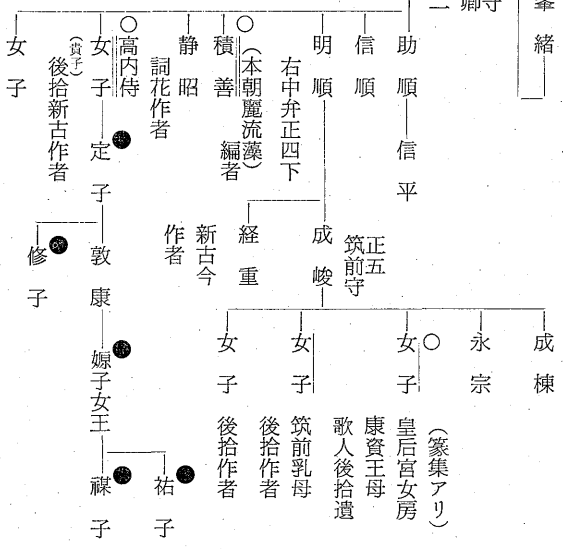
良臣 宮内卿正四下 ○式部大輔從二

助順 信平

成忠 西厘二九改真人為朝臣同年十一出家

長徳四七薨七十三才

(二位の新発意)



に●印を付ける。高階家は天武帝の孫、正二位左大臣長屋王の門流である。長屋王は懷風藻によって、その華麗な詩苑の様相を今日に伝え、唐朝にも文名を馳せ、その詠藻が記録される漢詩人であり、その門流が漢詩人として活躍することとなった。師尚の曾孫高階積善は本朝麗藻の編者、皇后定子の伯(叔)父にあたる。

懐風藻において目をみはるのは、長王作宝楼詩宴である。新羅客を宴する詩苑は國際的・外交的なもので、左大臣としての活躍が抜群であったから、聖武帝に危惧の念をいだかしめ、遂に謀叛の廉で自尽させられた⁷⁰。帝が恐れる強力な政敵で、出自は壬申の乱に父天武帝を助け、柿本人麿の挽歌で著名な高市皇子の長子、その才は唐朝までもなりひびいた。懐風藻は、その詩宴の詠藻十九首を収め、既に八世紀初頭に、唐朝天子の詩宴にまがう華麗な詩苑が本朝でも催されていたと、その雰囲気を鮮明に伝えてくれる。そのメ
ンバーをみよう。

- 宴長王宅
- 秋日於長王宅宴新羅客一首並序
- 全
- 初秋於長王宅宴新羅客
- 秋日於長王宅宴新羅客
- 全
- 晚秋於長王宅宴
- 於宝宅宴新羅客
- 初春於作宝楼置酒
- 秋日於長王宅宴新羅客
- 初春於左僕射長王宅謙
- 秋日於長王宅宴新羅客
- 全
- 於左僕射長王宅宴
- 春日於左僕射長王宅宴

- 境部 王
- 山田 三方
- 背奈 行文
- 調 古麻呂
- 刀利 宣令
- 下毛野虫麿
- 田中 淨足
- 長屋 王
- 長屋 王
- 安倍 広庭
- 百濟 和麿
- 百濟 和麿
- 吉田 宜
- 箭集 虫麿
- 大津 連首

○秋日於長王宅宴新羅客 藤原 房前
 ○全 藤原 宇合
 ○初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭 釈 道慈
 ○春日於左僕射長屋王宅宴 塩屋 古麿
 婦化系詩人も交え、当時一流の詩人がこぞって参集している。藤原不比等の第二子房前、第三子宇合も列席。正二位左大臣の佐保の邸第で催された詩宴で、新羅使臣も本朝の文華の侮り難い事をしたと想像され、それを予想しての詩宴活動であった。長王詩苑の声誉は、その流をつぐ文の家門高階家に誇りとして語り伝えられたに相違ない。成忠から積善、貴子へ、貴子から定子へと。貴子は「まことしき文者」であったから。大鏡道隆伝に……人く文つくりて講じなどするによしあしいとたかやかにさだめ給ふおりもあり⁷¹。二位の新発意の御ながれにて、この御ぞうは女もみなざえのおはしたるなり。母上は高内侍ぞかし。……それはまことしき文者にて御前の作文に文たてまつられしはとよ。少々のをのこにはまさりてこそきこえ侍しか。さやうのおりめしありけるにも、大盤所のかたよりはまいりたまはで、弘徽殿の上の御つぼねのかたよりとをりて、二間になむさぶらひたまひけるとこそうけたまはりしか、古躰に侍りや」と、貴子が本格的な漢詩人で宮中の作文会にも召された、と伝える。在原業平・恬子の血統も流入した高階門流の漢詩人貴子と、中関白道隆との間に、伊周、隆家、隆円、定子、原子、三の君、四の君があり、伊周は本朝麗藻の代表的詩人の一人、定子の漢才はもとより、三の君すら⁷²という人物であった。二位の新発

意の流れで女もみなぎえのおはしたるなりは注目に価する。伊周は現存本本朝麗藻に14首採られている。中書王19首、江以言19首に次ぐ。為時13首、公任11首、為憲9首、積善7首である。応製詩の「三月三日侍宴同賦間柳苑紅桃応製」「七言暮春侍宴左丞相東三條第同賦度水落花舞応製」をはじめ、寛弘二年三月廿九日道長邸の作文会における「花落春掃路」と題する

春掃不駐惜難禁 花落紛々雲路深 委地正心隨景去 任風便是趁蹤尋 枝空蕪微霞消色 粧脆溪閑鳥入音 年月推遷齡漸老 餘生只有憶恩心

は、小右記に「四月一日礼部納言示送云、昨日作文、外帥詩每句有感、満座拭涙、有牽出物馬……二日前越後守朝臣云、一昨左府作文、外帥詩有述懷、上下涕泣、主人感歎、有牽出物」と、満座を涕泣させた様子を二日にわたって記しとめられ、「この殿も御才日本にはあまらせたまへりしかばかゝる事もおはしますにこそ……」と大鏡がその学才を讃える人物である。

(5) 中関白門流の性格・氣質

酒豪で「御みきの乱れ」が甚しかった関白道隆、賀茂詣の日、「三度の御かはらけ」を大盃で「七八度などめして上社にまいりたまふみちにてはやがてのけざまにしりのかたを御まくらにて不覚に」眠りこんだが、到着して道長に袴の裾を荒々しく引かれ、ハッと目を覚し、用意の櫛・笄で「つくるひなどしておりさせたまひけるにいさゝかさりげなくてきよらかにておはしまし……この殿の御上戸はよくおはしましける」と甚だ好意的に語られる。「御やまひ

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

づきてうせたまひけるとき西にかきむけたてまつりて、念仏申させ給へと人々のすゝめたてまつりければ「清時朝光などもや極楽にはあらんずらん」とおほせられるこそあはれなれ」「御かたちぞいときよらにおはしまし、はや」と、その貴公子らしく明朗豁達、いわゆる「あいぎやう」——(魅力があり、人に好感をもたれる)——溢れる人柄を形成する。事実、鷹揚で心やさしい人物であった事は、枕草子に道隆の言として伝える。中宮定子に、冗談にまぎらわし言つてきかせる詞、「宮なに事をおぼしめすらん。こころめたき人々を据えなめて御覧するこそはうらやましけれ。一人わるきかたちなしや。これみな家々の女どもぞかし。あはれなり。よう願みてこそさぶらはせたまはめ」が、よく証する。殊に、bは道隆という人間の魅力をもよく物語るものである。最高の権力の座にある者が、これ又女性として最高の中宮(娘)に向つて、古来、何人がこのような忠告をしたであろうか。この道隆の心豊かさ、鷹揚さ、明朗さは、そのまま定子にうけつがれた。逆境にあつた定子は清少納言に対して、朋輩の女房達が道長方だと噂しい、疎外し、流石の清少納言も中宮の心中をはかりかねて里ごもりをするにいたつた時も、微塵も中宮の心に疑はなかつた。「かはりたる御けしきもなし」。それも「御前より宰相の君して忍びてたまはせたりつ」という長女の口上で、御文には「いひで思ふぞ」とかかせたまへる「御文であつた。一途に中宮眞風で、清少納言まで疑つてあしざまにいう女房達の心情も酌み、疑われている清少納言には「私はそうは思つていないよ」と慰める。双方へ細い心配りの、まことにサロンの名主人公である。しかも中宮は「例の思ふ人」と、清少納言

の道長眞履は公認しているのである。清少納言に歌人としての資質を期待した中宮は、清少納言の告白「なにか、この歌よみ侍らじとなん思ひ侍るを……」（普通）には勿論詠めるが、深養父、元輔の後といわれる自分が、抜群の歌がよめなくては、歌をよむ気にはなれない。しいて詠めと言われると宮仕をやめなくなる……）——を聞くとき、さつと許可する。清少納言の資質は所謂歌人にはなく、違った方面の、先人未踏の分野、筆者がいうところの呼応の文芸、散文詩、随筆……にあるらしいと覺り、それを育てあげようと思った。伊周が天皇・中宮へ献上の料紙を清少納言に下賜し、これに記すことを命じた。二九五(辨上氏三) 殿(靈本枕草子)かくて傑作枕草子が十一世紀初頭出現したのである。清少納言という異色の作家を育てあげ、「枕草子」という全く新しい様式の文芸作品を世界に贈りえたのは、皇后定子のサロンである。拙著註(の)ですでにのべたように、逆境にあつても常に春風台蕩、明朗で、才媛たちをあたたく見守る、ことに異才清少納言に対する信頼と愛情溢れる豊かな心、女房達の才能を見抜き、それを発揮させる資質と学才とをそなえたのが定子であつたからである。

伊周は学才は「日の本にあまる」と称されながら、叔父の豪胆な道長の前ではすくむより外なく、朝堂から逐い墮され、一宮の立坊まで奪われたが、大鏡に、「されど世のすえ人のこころもよはくなくりにけるにや、あしくおはしますなど申しかど元方の大納言のやうにやはきこえさせたまふな」と当然もつべき怨恨も深刻にもてぬお人好しと齒がゆがられ、政敵、敦成親王の誕生祝にのこく出かけ、百日和歌序を献るとは、何たることと叱咤される美男の詩人貴公子。

隆家は一門没落後も「よの人は宮の御ことありてこの殿御うしろみもしたまはゞ天下のまつりごとはしたまりなんとぞおもひ申たゆりしかとも」（敦康親王が即位する事となりて隆家が執権したら天下の政治はよく行われようとの期待をもたれていた）、彼は眼病に罹り、大式となつて下向したが、刀伊の入冠に遭う、「大式殿ゆみやのもとすゑもしりたまはねばいかゞとおぼしけれどやまごころかしこくおはする人にて筑後・肥前・肥後九國の人をおこしたまふをばさるることにて、府の内につかうまつる人をさへをしこりてたゞかはせ給ければ、かやつがたのものどもいとおほくしにけるは。さはいへど家たくおはしますすけにいみじかりしことたひらげたまへる殿ぞかし。おほやけ大臣・大納言にもなさせ給ぬべかりしかど、御まじらひたえにたればたゞにおはするにこそあめれ。このなかにむねと射かへしたるものどもしるして公家に奏せられたりしかば、みな賞せさせたまひき。種材は菅岐守になされ、其子は大宰監にこそなさせたまへりしか……」「菅岐対馬の國の人をいとおはく刀夷國にとりていきたりければ新羅のみかどいくさをおこし給てみなうちかへしたまでけり。さてつかひをつけて、たしかにこの嶋にをくり給へりければかの國のつかひには、大式、金三百両とらせてかへさせ給ける。」と隆家の豪胆、政治力、大政治家としての非凡な資質を物語る。武勲をたてた配下、拉致された島民らへの適切な処置、自己の事など問題外という隆家像は、今次敗戦でみせた將校の態度、今日の政治家、官僚のそれと比較する時、容易にない人物であつたことがわかる。事に臨んでの決断力、適切な対応の外、又、大向うを喰らせる演出の才が隆家は又拔群。

「三條院の大嘗会の禊にきらめかせたまへりしきまなどこそつねよりもことなりしか。人の『このきはくさりともくづをれたまひなん』とおもひたりしところをだかへんとおぼしたりしなんめり。さやうなるところのおはしましなり。節会、行幸にはかひねりがさねたてまつらぬことなるを、単衣あをくつつけさせたまへれば、もみちかさねてぞみえけるうへの御はかま龍膽の二重織物にていとめでたくけうらにこそきらめかせたまへりしか」、又、花山院との争に「輪つよき御車にいちもつの御車牛かけて御鳥帽子、直衣いとあざやかにさうぞかせ給て、えびぞめの織物の御差貫すこしぬいでさせ給て、祭のかへさに紫野はしらせ給君達のやうに、ふみいたにいとながやかにふみしだかせ給て、くくりはつちにひかれて、すたれいとたかやかにまきあげて雑色五六十人ばかりにこゑのあるかざりひまなく御さきまいらせ給」^{a b}、でやともすれば、人目をアツと驚かす演出をする。その桁外れの才能と効果を楽しく語りきかせる。a、gはいかに目を驚かせる、楽しく美しい演出であったか、しかも、大人気ない花山院の「かちえさせ給へりけるをいみじとおぼしたるさまもことしもあれ、まことしきことのやうなり」と非難する大鏡作者は、隆家の方は「無益の事をもいひてけるかな、いみじきぞくかうとりつる」とてこそ、わらひたまふけれ」と花山院より一廻り大きい人物として扱う。この天下をアツといわせる趣向の才、服飾感覚は姉皇后定子に共通の資質である。18才の定子は宮廷の慣例を破って五節の舞姫を出し、そのかしづきを12人中10人

サロンの文芸活動 — 皇后定子とその系流 — (一)

出した。奇想天外の小忌衣装で揃えて天下を驚歎させた。後世この趣向は追隨者が出る程、人々に深い感銘を与えたのである。

今日残存する歌合中最古のものは、平安朝歌合大成によれば民部卿行平歌合である。業平の兄である。次は仁和三年八月廿六日以前中将御息所歌合とされる。これを筆者は拙著で、業平女(中将御息所)主権歌合かと考えている。業平・恬子のみやび、在原家門にある和歌をよすがの歌合、サロンの系脈に、長屋王以来の詩人の血統をうけつぐ高階門流の長屋王詩苑への讚美、憧憬の系脈とが、一つとなつて高階流となり、貴子をへて定子へと、更に娘子、祐子、禊子へと、サロンの血脈は流れてゆく。長王詩苑は新羅使臣を迎えての国際的な華麗なものであった。あたかも唐朝天子の詩苑が朝貢諸蕃の使臣を加えたように。その声誉を誇りをもつて語りつぐ高階門流に、更に誇り高き齋宮の、唐代公主の詩譚を思わせるような、當代有名歌人業平を迎えての風流があり、その血脈も流れこんで貴子から定子へと、白氏文集の指導と共に、語り伝えられたと思われる。定子以前のサロンは、歌合にすぎなかった。殊に大齋院以前は唐代公主サロンのように、帝の後援による有名歌人を招いての歌合にすぎなかった。選子が、齋院のつれづれに自己のサロンの女房達と、和歌をよみあう、語りあうサロンに仕上げた。定子は、そのような平凡な歌のサロンに満足せず、物語評論、自然・人間・文化にかかわる論をサロンのテーマとした。ことに白氏文集の世界に憧れて暮した。殊に、その才能を憚るところなく「あいぎやう」あるていで發揮した大胆さと気位(五節の舞姫)。逆境にあつて道長の妨害にあいながら、神経質にもならず、魔擲にかまえ、笑をたやさぬ

サロン形成——（「大進生冒が家に」の段では「笑ふ」「笑ひ」「笑へば」が11回も出る）——は非凡である。中関白道隆ゆづりの鷹揚、明朗、豪胆、あいぎよう溢れる氣質に、二位新発意成忠のしなやかな氣質も伝って、まさに傑出したサロンの主人公定子が出現したのである。

註(1) 拙著「東西女流文芸サロン——中宮定子とランヴェイエ侯爵夫人

——」

註(2) 拙著「平仲物語論」 一八〇頁〜一九二頁

註(3) 拙著「枕草子論」 四八頁〜六八頁

註(4) 「東西女流文芸サロン」 一二四頁〜一五四頁

註(5) 同右 二九頁〜三四頁